



「塩釉藍彩髭徳利」(金剛峯寺遺跡出土) 金剛峯寺
17世紀前半にドイツのライン地方で生産、ワインが封入され日本へ、そして高野山にもたらされました。中身が消費された後は、花器として珍重されました。下図は塩釉藍彩髭徳利が出土した金剛峯寺遺跡発掘調査区(高野山霊宝館平成大宝蔵建設に伴う調査)

第141号 目次

冬期平常展のご案内……………2～3

収蔵品の紹介III……………4

高野山の古建築 第四十回……………5

特集高野山……………6～7

高野山霊宝館からのお知らせ……………8

令和4年度 冬期平常展
「密教の美術」
令和5年1月21日(土)～4月9日(日)

毎月21日(弘法大師の日) ご来館の方にプレゼント差し上げます。

震宝館だより

題字・畚野光義師

霊宝館だより 第141号
令和5年2月18日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山306
公益財団法人高野山文化財保存会
高野山霊宝館
電話0736-56-2029
URL <http://www.reihokan.or.jp>

利用案内

■ 開館時間	5月1日～10月31日 8時30分～17時30分 11月1日～4月30日 8時30分～17時00分	■ 拝観料 大人 1300円 高・大学生 800円 小・中学生 600円 高野町に住居票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。 (住所記載の証明書提示要) ■ 専用駐車場あり
■ 休館日	年末年始 (展示替えに伴い臨時休館あり)	

高野山霊宝館からのお知らせ

「ミュージアム法話」(お坊さんによる法話と展示解説)を、左記のとおり開催いたしました。

10月22日(土) 講師 阿部眞秀 師
11月26日(土) 講師 齋藤寛秀 師

今後の開催予定
5月20日(土)、6月3日(土)、
7月1日(土)、8月5日(土)、
9月2日(土)、10月7日(土)、
11月11日(土)
いずれも午後1時より約45分



ミュージアム法話開催風景
(高野山本山布教師 阿部眞秀師)



国宝 響替指帰 金剛峯寺



国宝 諸尊仏龕 金剛峯寺

◎展覧会予定
宗祖弘法大師御誕生1250年大法
会記念展「お大師さまから・お大師
さまへ」(予定)
4月15日(土)～10月9日(日)
出陳品



重文 金銅三鉗杵(飛行三鉗杵) 金剛峯寺

- ・高野山三大秘宝
国宝 諸尊仏龕 金剛峯寺
国宝 響替指帰 金剛峯寺
重文 金銅三鉗杵(飛行三鉗杵) 金剛峯寺
- ・その他出陳品
国宝 勤操僧正像 普門院
国宝 細字金光明最勝王經 龍光院
重文 高野大師行状図画 地藏院
重文 崔子玉座右銘断簡 宝亀院
未指定 金念珠 龍光院
未指定 稚児大師像 正智院
- ・秋期企画展「弘法大師の弟子たち」(予定)
10月14日(土)～令和6年1月14日(日)
冬期平常展「密教の美術」(予定)
令和6年1月20日(土)～4月14日(日)

◎友の会会員募集
・会員証提示で会員本人様のみ霊宝館と金堂・大塔の拝観無料
・霊宝館発行の季刊誌「霊宝館だより」送付

〈年会費〉
一般会員(個人) 3,000円
賛助会員(法人) 30,000円
皆様のご入会をお待ちしております。

◎貸出情報
●香川県立ミュージアム(香川県高松市)
特別展「空海―史上最強、讃岐に舞い降りた不滅の巨人―」
4月22日(土)～5月21日(日)
国宝 諸尊仏龕 金剛峯寺
国宝 善女竜王像(定智筆) 金剛峯寺
重文 恵果阿闍梨像 西生院

がアップされました。皆さま、チャンネル登録(チャンネル名「高野山霊宝館」)して、霊宝館収蔵の文化財の解説をお楽しみください。
・展示解説「釈迦如来像・大日如来像・阿弥陀如来像」
・展示解説「阿弥陀三尊像」
・展示解説「孔雀明王像」

お問い合わせ先 高野山霊宝館 TEL 0736-56-2029(代)

連載

高野山の古建築

清涼院 井伊直政霊屋

第四十回

鳴海 祥博



井伊家墓所の全景 正面3間、側面1間、切妻造り、唐破風付きの霊屋を中心に。左右に歴代藩主、一門の墓石が建ち並び。写真の左端は大老井伊直弼の墓石。



『奥院絵図』の墓所 宝永4年(1707)の製作。赤い建物が5棟見える、右の2棟と左の建物に「井伊掃部頭」とある。中の2棟には「上杉家」とある。右から2棟目が現存の霊屋だろう。入母屋造りで現状とは異なるが、唐破風が描かれている。



霊屋側面の詳細 妻飾りは「虹梁大瓶束」で、大瓶束の足元を蓮の葉としているのは霊屋を意識した意匠だろう。中央の墓股は高肉彫りの彫刻で飾られている。木鼻や台輪の線形は様式的には17世紀末頃を思わせる。



霊屋正面の詳細 部材が木太く、重厚な造りである。中央間の組物は、正面に出る肘木が「象鼻」となっている。正面中央を手の込んだ軒唐破風として荘厳さを演出している。

一の橋からお大師さまの御廟に向かつて、奥之院参道を五百mほど進んだ、「二十三町石」の左の山手に小さな建物がありません。それは正面三間、奥行き一間、切妻造り、正面軒唐破風付き、赤い塗装や彩色で彩られた建物です。正面中央間に棧唐戸が建て込まれ、その他の柱間には壁の代わりに五輪塔形の卒塔婆が、隙間なく建て込まれています。その数は正面に六本、側面に十二本、背面に十九本、合計四十九本で、弥勒菩薩のいる兜率天の宮殿の数「四十九」を象徴しています。奥之院を「弥勒の浄土」とする信仰に基づくと、霊屋ならではの造形です。誰のお墓なのだろうか？と近寄ってみると、「井伊掃部頭墓所(廟)」と標識が建っています。霊屋とその両側に並ぶ大きなお墓は、滋賀県彦根の井伊家とその一門の墓所のようにです。霊屋は扉が閉まっています。中を窺うことはできません。「善

提所清涼院」とあったので、高野山の塔頭寺院、清涼院さまに霊屋のことを伺ってみました。この霊屋が何時建てられたのかは分からないが、堂内には一基の宝篋印塔が安置されていて、それは彦根藩井伊家の初代井伊直政のものであることが、かつて彦根城博物館が調査した際に確認できた、とのことでした。建物をみると、正面の六本の卒塔婆には、梵字や文字が刻み込まれていて、何れも下方に「為泰安大居士」とあります。井伊直政の法名は「祥壽院殿清涼泰安大居士」なので、これは「井伊直政霊屋」で間違いなく確信しました。井伊直政は永禄四年(一五六一)の生まれで、一五歳で徳川家康に仕え、信任を得て侍大将となり、配下の侍と共に赤い装束を身にまとい、数々の合戦で功績を挙げたと言います。関ヶ原の戦の後、徳川の天下統一に尽力しますが、家康が征夷大将軍となって幕府を開く前年の慶長七年(一六〇二)に四二歳で亡くなりました。直政は家康を支えた「徳川三傑」また「徳川四天王」の一人として称えられています。直政は彦根市にある長松院の地で茶毘に付されたと言えられています。やがて高野山にも供

養塔が建てられたと思うのですが、現在の霊屋は、建築様式を見る限り、没年の慶長七年頃の建築とは思えません。では現在残る霊屋は何時建てられたのでしょうか。宝永四年(一七〇七)に作製された『奥院絵図』という、奥院参道にある墓石を詳細に描いた図が金剛峯寺に残されています。それを見ると、「井伊掃部頭」と注記された建物が三棟描かれています。それは入母屋造りで正面に唐破風が描かれています。位置関係を見ると、その内の一棟が、現状の建物に違いないと思います。頭貫や台輪の木鼻の形状は、元禄一二年(一六九九)から再建に着手された現在の高野山大門と似ています。立体的な彫刻の施された墓股も江戸前期の作品にふさわしいように思います。延宝四年(一六七六)に三代藩主直澄が亡くなります。井伊家の霊屋三棟は、それを契機に、四代直興が先祖三代の墓所の整備を行ったのではないかと、想像します。直興は井伊家中興の祖と言われ、晩年には出家しています。高野山でも珍しい霊屋建設の契機は、四代直興の深い信仰心の表れのように思います。様々な謎を秘めた「井伊直政霊屋」をこれからも手厚く守り伝えて欲しいと思います。

瓦器小埴 (六器・二器)

金剛峯寺遺跡出土 器高二・二cm 口径八・八cm 鎌倉時代(13~14世紀) 金剛峯寺蔵

真言宗や天台宗などの密教寺院の仏堂の内陣には、本尊の前に密壇や大壇、また護摩壇などの修法壇が置かれます。これらの修法壇の上には、密教法具と呼ばれる仏具が並び、僧侶が修法を行う際、仏を供養する作法において使用されます。これらの使用方法は、大きく二つに分かれます。一つは使用の際、僧侶が密教法具を手取るもの、もう一つは手に取らないけれども、作法には必要なものです。今日、これらの密教法具は金銅製のものが主流で、あたかも金属製でなければならぬように思われがちですが、実は本来その材質は金属製に限りません。

密教法具の製作については、様々な經典や儀軌、また師僧が弟子に伝える口伝の中には、さまざまな材質で製作することが定められています。例えば、今回ご紹介する瓦器小埴ですが、昭和六十年(一九八五)、金剛峯寺遺跡内の金剛峯寺南側にある、尼僧学院の建設に伴う発掘調査で多数出土しました。一見すると、生活雑器の小埴に見えますが、瓦器の他にも、同様な形状の黒色土器、灰釉陶器といった土器にも類例があることがわかりました。出土遺跡としては、奈良県の東大寺、西大寺、興福寺、元興寺(以上、奈良市)、長谷寺(桜井市)、大峯山寺(天川村)、

大阪府の龍泉寺(富田林市)、天野山金剛寺(河内長野市)などの寺院遺跡が挙げられます。これらの遺跡から出土した小埴を観察すると、不思議なことに焼成時に付着した、内外面の黒く燻された部分が、激しく摩耗し、また口縁端部が何かと衝突して打ち欠かれたような痕跡があり、灰白色の胎部が露出しているものが多数みられました。これらは、密教寺院からの出土ですので、密教法具ならば、何らかの密教の作法と関係があるものと見当がつかまりました。そこで、小埴と同様な形状の密教法具を検討したところ、修法壇である、密壇、大壇、護摩壇に置かれる六器(関伽器、塗香器・華鬘器)、脇机に置かれる二器(洒水器・塗香器)を使用して作法する際、六器の関伽器は、椀の中の水を花埵(受け皿)に濯いで、椀の底で花埵の見込

み部分を叩く作法(図4)、二器の洒水器は散杖の先を椀に入れて、中の水をかき回し、散杖に付着した水を口縁端部で叩いて水切りをする作法(図5)、また修法の終了後、椀を重ねて洗い、仕上げに水切りする際、椀と椀が激しく接触する作法など、椀と椀が接触する場面がいくつもあることがわかりました。これらの椀と椀が接触する部位と、小埴に見られる摩耗痕や、散杖で叩いた跡が一致し、小埴が密教法具であることがわかりました。高野山上の子院数は、かつて現在の一七カ寺よりも多く、江戸時代の最盛期には一八六五カ寺もの寺院が犇めいていたという記録があります。金属製の密教法具は高価ですから、恐らく比較的安価な土器の密教法具が多用されたでしょう。(鳥羽正剛)

収蔵品の紹介 111



図1 瓦器小埴(見込み)



図2 瓦器小埴(側面)



図3 瓦器小埴(底部)



図4 関伽器の作法(椀で花埵を叩く)



図5 洒水器の作法(散杖で椀の口縁端部を叩く)

特集 高野山

「貞暁上人（鎌倉法印）」

高野山霊宝館長 大森 照龍

高野山霊宝館では令和四年四月十六日(土)～七月十日(日)、春期企画展「鎌倉時代の高野山」を開催いたしました。その企画展中展示いたしました「金銅梵字懸仏(アーク字)」（御正体 図1）ですが、この懸仏



図1 「金銅梵字懸仏(アーク)」 金剛峯寺蔵

奉納者は同背に墨書銘で「権少僧都貞暁 承元三年(一一〇九)八月十六日供養之」とあります。この貞暁上人(鎌倉法印)は鎌倉幕府将軍

「源頼朝」の第三子でしたが、母が正室(北条政子・平政子)ではなく、侍女の大進局の子でした。そのため政子の嫉妬を避け、建久三年(一一九二)の七歳の折、仁和寺に預けられたようです。上人はその後十八歳で出家、高野山にも来山された仁和寺七世道法親王(後高野御室)より伝法灌頂を受けて、勝宝院・華藏院を配領されました。はじめ法名を能寛と呼ばれていたようですが、後に貞暁と改めます。ただし高野山においては称号が多く先の鎌倉法印以外に千阿弥陀・高野法印・三位僧都・土砂阿闍梨とも称されていました。

さてこの懸仏は平成十六年の伽藍御社の屋根葺替、彩色修理が行われ、それに先立つ遷宮準備の時に発見されたもので、平成二十七年の企画展「高野山の御神宝」にて初公開されました。胎藏界大日如来の種子(アーク)を鏡面の中央にあしらった懸仏で、胎藏界大日如来は丹生明神の本地にあたり、伽藍明神社右の丹生明神のご神体として奉られています。懸仏は神仏習合信仰から生まれた御正体(本地仏)などを表す形式の像です。本像は一般に見受けられる懸仏と違い円形の中に全てを作り込むのではなく、蓮台を円形下部に付けるという特異な形式を用いている懸仏です。貞暁上人が高野山にいられたのが「高野春秋編年輯録」(高野春秋)によれば、承元二年(一一〇八)三月であり、翌年にこの懸仏を奉納したこととなります。

僧として尊崇されていた同じ仁和寺出身の行勝上人を慕い高野山へ隠遁されます。懸仏の細工等を考えると一年で完成するのか疑問が残ります。予め自分の立場(世継ぎ問題)や世情を考慮し、高野山隠遁を考え制作していたとも考えられます。

この貞暁上人の来山と同じくして高野春秋や「吾妻鏡」によれば北条政子は熊野詣をし、帰りに天野社に立ち寄ります。その折に貞暁上人は師である行勝上人と共に北条政子を勧化し天野に新たに三宮大食都比売大神(筥飯明神)(氣比明神)(*蟻通明神と言ふことあり)・四宮市杵島比売大神(厳島明神)の勧請をし、社殿および御影堂の造営を願います。御影堂は高野山が女人禁制であったためと乱世で身内を失った女性等が集まり高野山弘法大師を遙拝

するために作られました。この二神勧請は行勝上人の夢告に丹生明神が現れ「筥飯(大食都比売大神)(氣比明神)・市杵島比売大神(厳島明神)は往昔の朋友」であると述べたということに基づいています。一説には北条政子(平政子)が平氏の末裔であり、平氏の関係が深かった氣比明神・厳島明神の二神を勧請したとも考えられています。

計らずしも承元二年は貞暁上人・北条政子の不思議な縁を感じる年でありました。そして承元三年の懸仏奉納は先のように世情、しいては将軍家(源家)との決別であったのではないのでしょうか。その決意を持って懸仏を奉納して高野山永住を誓ったと思われれます。

他に貞暁上人には、北条政子に政治復帰を望まれたこと、また自分が政治の復帰の野心が無いことを示すためとも言われますが、自らの目を突いて、潔白を示したと伝えられています。これも北条政子が熊野へ承元二年(一一〇八)と建保六年(一一二八)の二回ほど参拝帰りに天野社へ寄っていることから、貞暁上人が自ら目を刺したとの話ができたのではないのでしょうか。

このように世間のしがらみをたつて高野山にて隠遁生活を送っていた貞暁上人ですが、建保五年(一一二一

七)五月七日、師である行勝上人が入寂し、墓を一心口に建て行勝宮とします。同じく行勝上人が住んでいた経智坊に千体の地藏菩薩を制作建立します(これが地藏と阿弥陀の違いがあるが千阿弥陀仏と呼ばれた所以か)。そしてこの頃より貞暁上人は将軍家追悼のために阿弥陀仏等を作り始められました。政子の援助もあり、貞応二年(一一二二)二月貞暁上人は将軍家追悼のため丈六阿弥陀、阿弥陀堂並びに五輪塔が完成します。この本尊阿弥陀如来の中に、将軍家の遺髪を入れたと伝えられています。

また同じ年に、奥之院拝殿が壊れて作り直し、廟塔および鎮守社等の葺替を行います。その折、貞暁上人は奥院拝殿に大小二壇、磬台、礼盤等を寄進。また理趣経百巻を御廟前に奉納し、御廟前を洒浄し清浄無垢の潔境といたします。これ以降、御廟前は完全聖域となったと伝えられています。

嘉禄元年(一一二五)この年に北条政子は亡くなります。

嘉禄三年(一一二七)千阿弥陀書状(図2)は将軍家菩提のために作られた阿弥陀仏の灯明料供養のための書状ですが「千阿弥陀仏」とあり、文面内容と文字、紙材等、鎌倉時代に貞暁上人によって書かれたと考え



図2 「五坊寂靜院文書 千阿弥陀佛施入状」 五坊寂靜院蔵

られます。千阿弥陀とあるように貞暁上人は修験道者・密教僧であると同時に熱烈な阿弥陀信仰者であったのでしよう。

寛喜元年(一一二九)七月十三日、貞暁上人奥之院に天下泰平・護国利民・満山安全・人法久栄を祈り護摩堂創建(再建か)します。現在重要文化財である不動明坐像(図3)を寄進したと伝えていきます。この像は肉身部を青く塗り、目と歯に水晶をは嵌めこ込むという特徴ある明王像です。

このように高野山で過ごした貞暁上人ですが、寛喜三年(一一三二)二月二十二日、四十六歳で亡くなります。「吾妻鏡」にも源頼朝の御落胤「貞暁」高野山で亡くなり喪に服したとあります。

将軍の子として生まれ、時代に翻弄されたように映りますが、懸仏・書状・彫刻などに触れると、僧侶として高野山・天野社の興隆や発展に大いに尽力したことが窺えます。



図3 「重文 不動明王坐像(奥之院護摩堂旧在)」 金剛峯寺蔵